

^ 13
3842
2



門 13
號 3842
卷 2

春曉八幡佳手二編

序文お揃ふ附言

お揃ふ一冊の中身は其の如く切きと道守の教訓の

一冊の如く古人の著る酒席の同くは唯男女の誠を

盡すに實情と云ふは石見の林市の一冊ありてその

情人の如くを總りて婦人の舞臺の如くは新中人が

一夫を以てて教婦の如くは其の如くは其の如くは

婦人の如くは其の如くは其の如くは其の如くは

あまぐり、土地に住む其所の小人命の
の判事、土地を著述して、此
所徳知の邊を痛む、身命忍ぶ、行は人をして作者と
し、の推量、物に世間の統、
し、業の、
らるる、
て、後、
あ、

渡、漢王の奇、
系、
戯、
情、
前、
あ、
あ、
あ、

産名の國 *Sanme no Kuni*
 産名の國 *Sanme no Kuni*
 産名の國 *Sanme no Kuni*
 産名の國 *Sanme no Kuni*

一の近來 *Ikko* 作 *Saku* 近來作 *Saku*
 辰巳 *Tsuneshige* 今 *Ima* 雷 *Kaminari* 今 *Ima* 雷 *Kaminari*
 百 *Hundred* 夫 *Utae* 始 *Hajime* 夫 *Utae* 始 *Hajime*
 人 *Person* 必 *Must* 詳 *Detailed* 必 *Must* 詳 *Detailed*
 廿 *Twenty* 日 *Day* 教 *Teach* 廿 *Twenty* 日 *Day* 教 *Teach*
 一 *One* 日 *Day* 母 *Mother* 一 *One* 日 *Day* 母 *Mother*

孝 *Chū* 人 *Person* 情 *Heart* 夫 *That* 夫 *That* 夫 *That*
 人情 *Human Heart* 夫 *That* 夫 *That* 夫 *That*

看官 *Viewer* 知 *Know* 看官知 *Viewer Know*

江戸 *Edo* 人情 *Human Heart* 夫 *That* 夫 *That* 夫 *That*

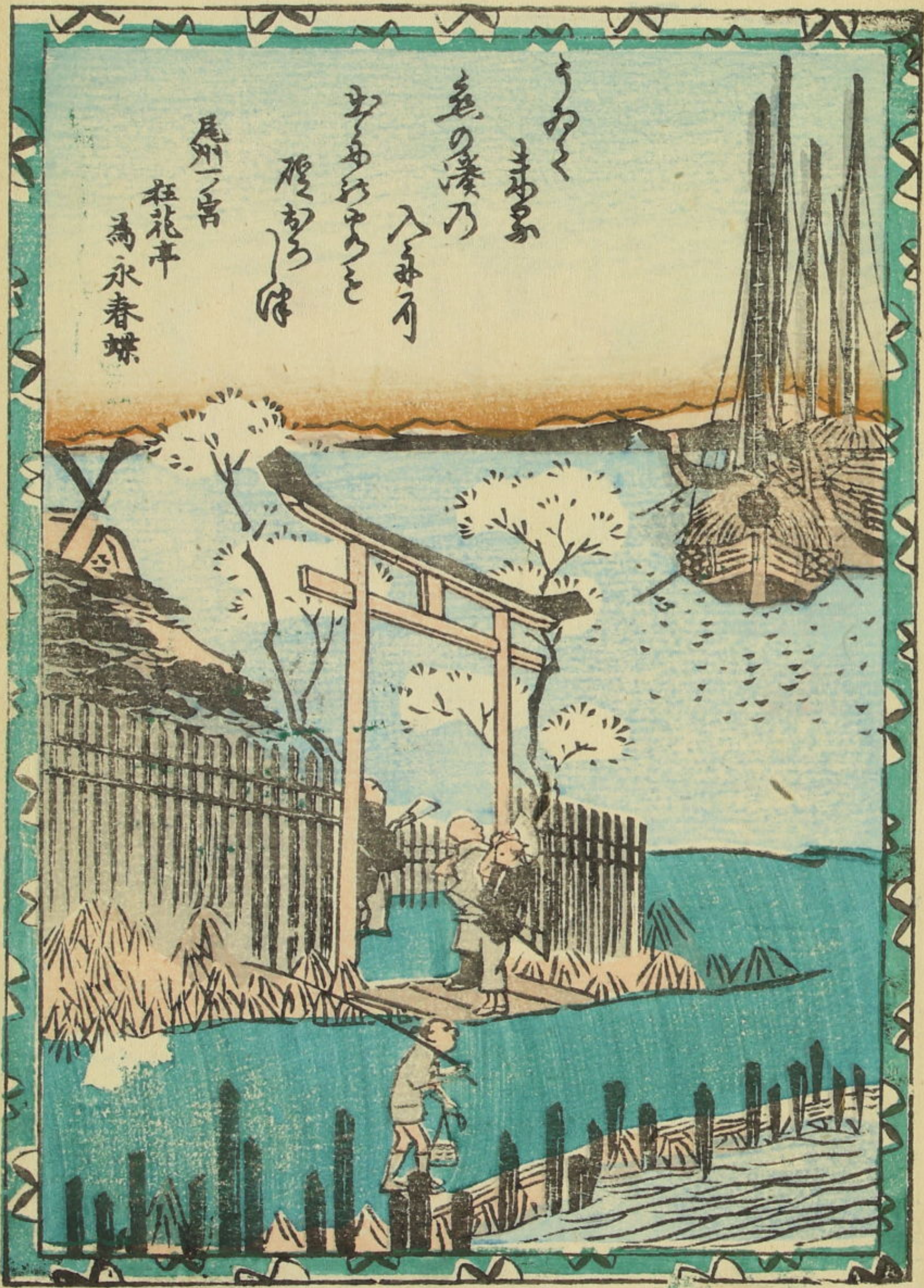
為 *For* 水 *Water* 春 *Spring* 水 *Water* 迷 *Lost* 迷 *Lost*

河野勇臣十八森

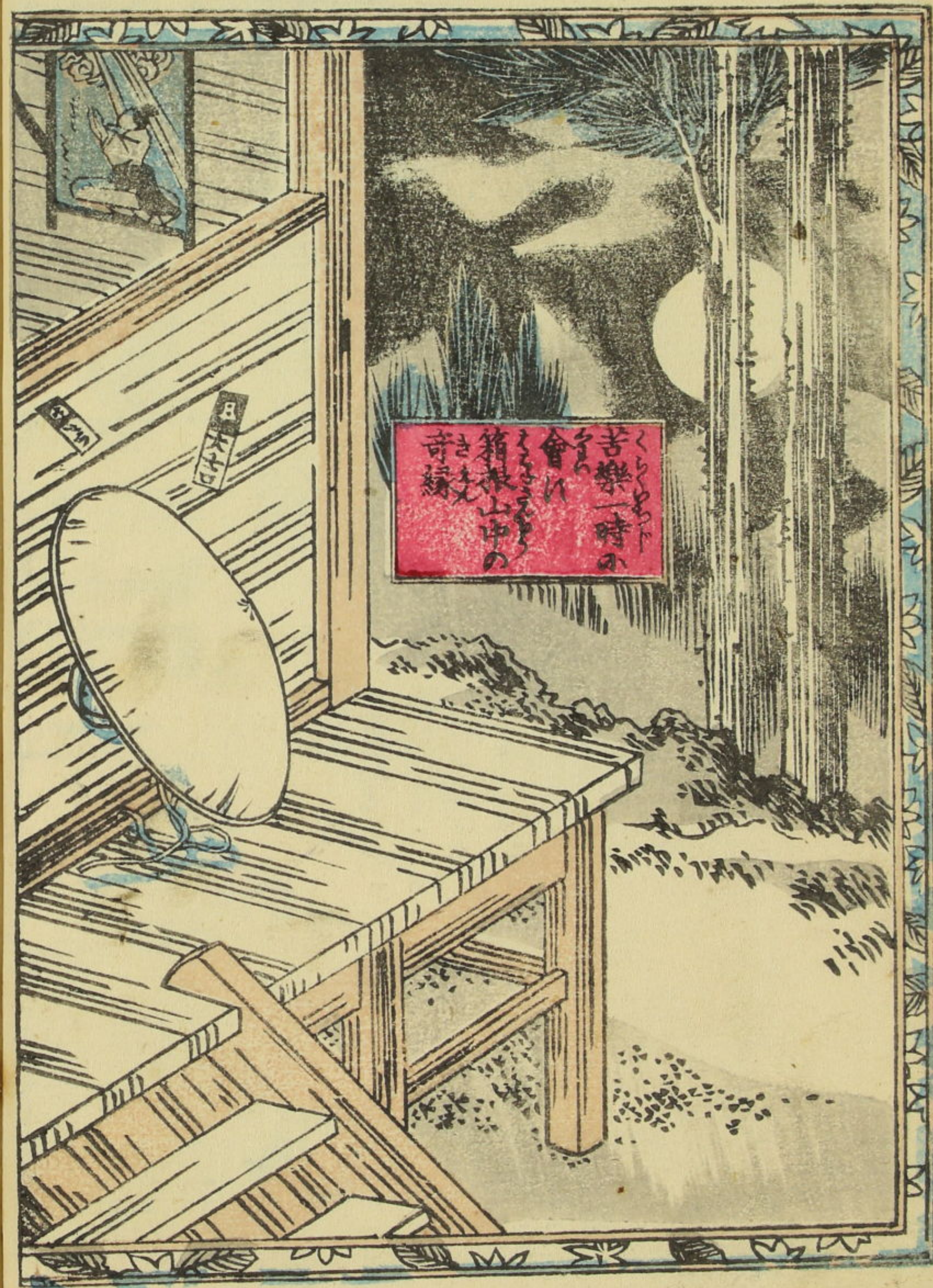
狂訓亭主人 爲永春水撰著
初輯五卷

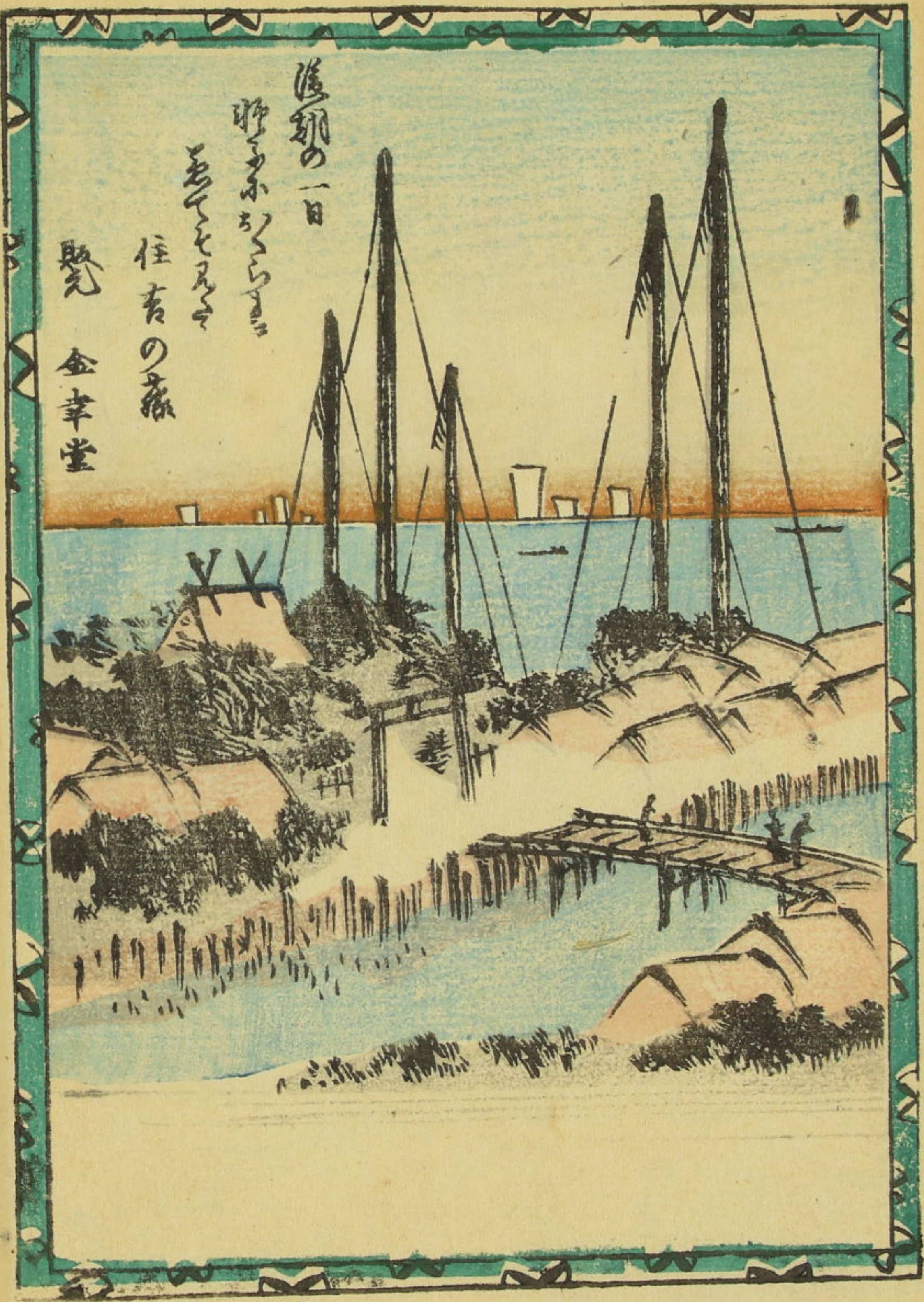
その伊豫國道後の城主河野家と稱する累代の旧家あり往昔神功
皇后三韓退治の時小橋と出さざりし將軍の一將ゆゑ海上の陣第一
の智勇殊に兵法練磨の秘卷と傳え推古天皇の御守にわづらひ河野
の益躬小日本船司職の倫旨と賜り東海西海の漁人みまをふと傳え海上
の下知萬端河野の令小隨ひ且船長漢人とことごとく河野の家僕と定らる
河野中興あり河野の四郎通信ハ幡太郎義家の甥ゆゑ治承年中乃
武功技輩あるゆゑのゆゑ名家の面え高かり斯く後此家小森といふ字を
氏と廿一人の英勇あり里見の八犬大内の十杉小森といふ字を
結と河野軍記の別傳小森とらざる元とて爲小新嘗の一人奇書
述日るまゝして高覽と願ひしにあらん

販元 金華堂壽粹



うわく
まゝ家
毛の淺乃
入ふあり
あまのりやと
歴あり
尾州二宮
狂花亭
爲永春蝶





後朝の一日
 晴ふらふら
 住吉の森
 覽 金草堂

春曉八幡佳年三編卷之一

江戸 爲永春水著

第十三章

心気付くもさるる昔の友
 とも物草ともかりぬ折を淋し
 て久あく暮糸控身夜はらど
 心み後さく折く此處春の
 て迎隣と物あけふはまぐい
 せん方ぞ多く祈るる

^ま ^ら ^な ^こ ^あ ^や ^き ^に ^あ ^や ^手 ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を
 分 ^の ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を ^あ ^や ^手 ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を
 の ^の ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を

○ ^ら ^な ^こ ^あ ^や ^き ^に ^あ ^や ^手 ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を

^あ ^や ^手 ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を ^あ ^や ^手 ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を
 身 ^の ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を ^あ ^や ^手 ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を
 今 ^の ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を ^あ ^や ^手 ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を

^あ ^や ^手 ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を ^あ ^や ^手 ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を
 今 ^の ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を ^あ ^や ^手 ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を

^あ ^や ^手 ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を ^あ ^や ^手 ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を
 今 ^の ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を ^あ ^や ^手 ^紙 ^の ^古 ^き ^紙 ^を

十景

あなごころのさかすかに
うららかにあそぶあそび
すくすくあそぶあそび

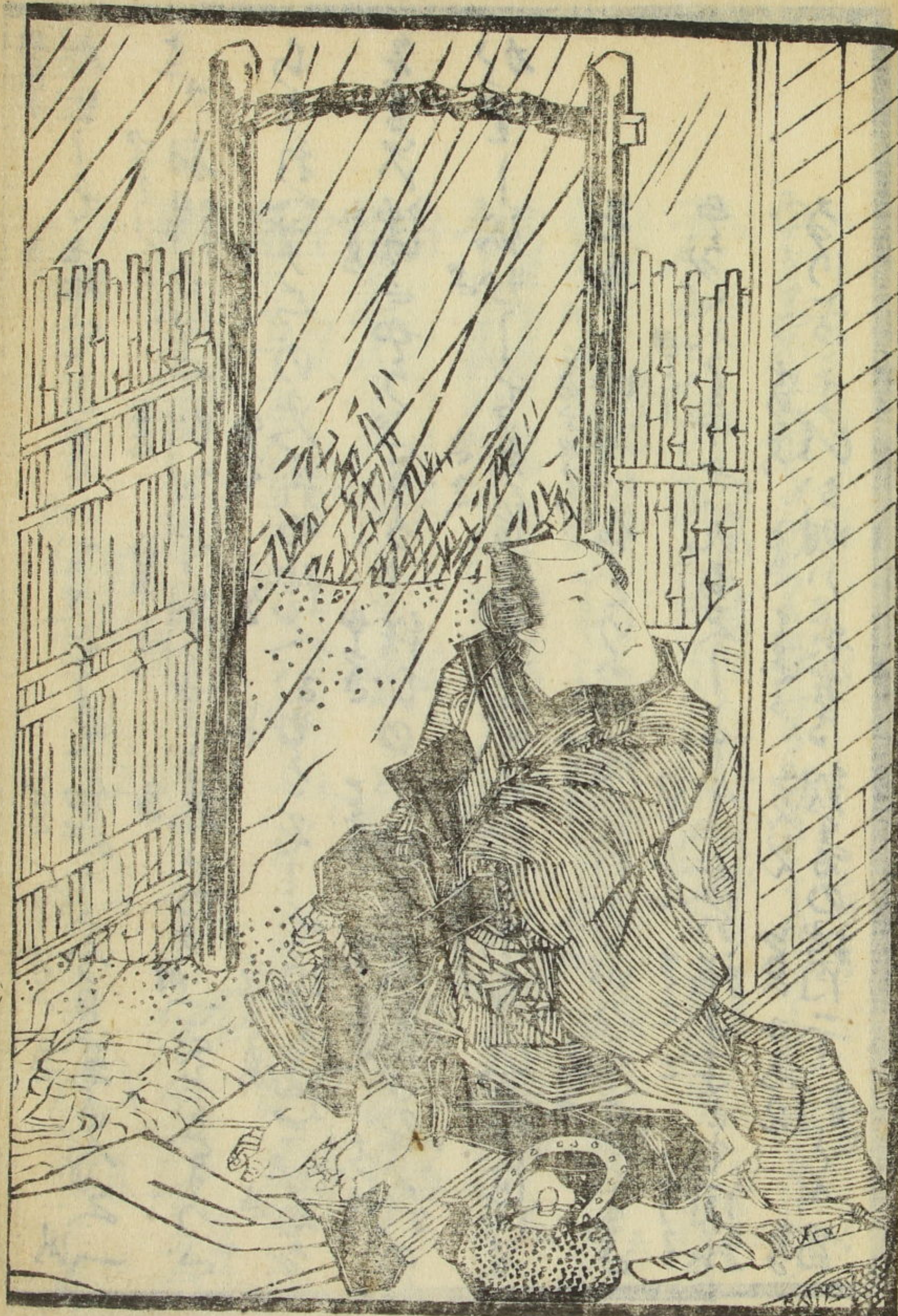
あなごころのさかすかに

あなごころ

あなごころ

あなごころ

あなごころのさかすかに
うららかにあそぶあそび
すくすくあそぶあそび
あなごころのさかすかに
うららかにあそぶあそび
すくすくあそぶあそび
あなごころのさかすかに
うららかにあそぶあそび
すくすくあそぶあそび
あなごころのさかすかに
うららかにあそぶあそび
すくすくあそぶあそび

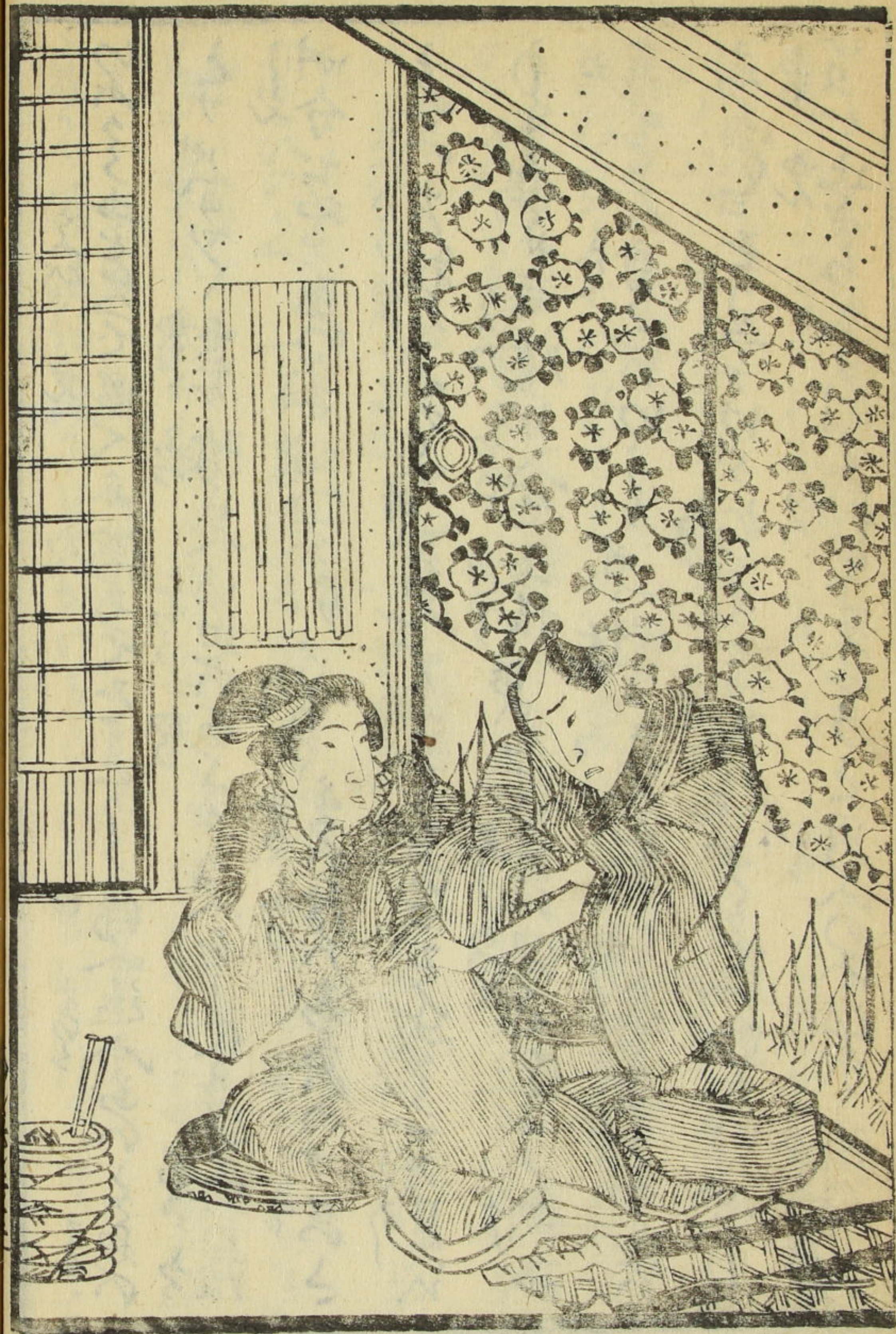


海江舟もまはせんとせん道も男もまじり親もまじり
身分も遊ずると家柄よろしくも一人親親おぼえの
近寄十里もどあるおのり所の大なるおわづけな
宇田船も一廻へ押とある世間へおぼえな
まじりゆくゆくそまらぬもまじりてゆくの中は親の
かゝもあつて身とあつてせし親はあつておぼえ
しとあつておのり所はあつておぼえにまじりゆく
他人もあつて今もあつておのり所はあつておぼえ

くまもあつて親もあつてせし親はあつておぼえ
まじりゆくゆくそまらぬもまじりてゆくの中は親の
かゝもあつて身とあつてせし親はあつておぼえ
しとあつておのり所はあつておぼえにまじりゆく
他人もあつて今もあつておのり所はあつておぼえ

第十四章

海江舟もまはせんとせん道も男もまじり親もまじり
身分も遊ずると家柄よろしくも一人親親おぼえの
近寄十里もどあるおのり所の大なるおわづけな
宇田船も一廻へ押とある世間へおぼえな
まじりゆくゆくそまらぬもまじりてゆくの中は親の
かゝもあつて身とあつてせし親はあつておぼえ
しとあつておのり所はあつておぼえにまじりゆく
他人もあつて今もあつておのり所はあつておぼえ



おきんと二人をくまにじて居るのい樂む子まきくた夢ふはよく
 降くまのうげえんくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 梅らやア雪らわ入トくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 お射の馬戸もあたらうがー陽一隣家の方へむひ 一隣の
 老女えんく今ふ小降おあううらうくくくくくくくくくくくくくくくくく
 吹うけそりけあト一馬戸もあたらうくくくくくくくくくくくくくくくくく
 吹返くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 寺所の境へ相伝きてお淋しくヨシとくくくくくくくくくくくくくくくくく

あひしと思ひしう宮日か暮れぬのいそぐく早のけきと
 燈火伝付れまおきえんく今でわくくくくくくくくくくくくくくくくく
 初ト小登れあうて仕出く入く夜合の葉を焼て中くおそそ
 夜も初更もまだあまのきまぐ材料の葉の物もまきくく
 もお集あつてどもお集あつて第一向か目もまきくくお射の槍く森
 鳥の鳴き地かんぎくえん九哲の下に槍をうらう 時サマを記ヨ
 ヲ感えんくまの目もまきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 志づくわんうらうアお集あつてお集あつてお集あつてお集あつてお集あつて

知らぬ者にて
 夫は二月の月が待たぬ人なりと
 夫は三月の月が待たぬ人なりと
 夫は四月の月が待たぬ人なりと
 夫は五月の月が待たぬ人なりと
 夫は六月の月が待たぬ人なりと
 夫は七月の月が待たぬ人なりと
 夫は八月の月が待たぬ人なりと
 夫は九月の月が待たぬ人なりと
 夫は十月の月が待たぬ人なりと
 夫は十一月の月が待たぬ人なりと
 夫は十二月の月が待たぬ人なりと

夫は三月の月が待たぬ人なりと
 夫は四月の月が待たぬ人なりと
 夫は五月の月が待たぬ人なりと
 夫は六月の月が待たぬ人なりと
 夫は七月の月が待たぬ人なりと
 夫は八月の月が待たぬ人なりと
 夫は九月の月が待たぬ人なりと
 夫は十月の月が待たぬ人なりと
 夫は十一月の月が待たぬ人なりと
 夫は十二月の月が待たぬ人なりと

夫は三月の月が待たぬ人なりと
 夫は四月の月が待たぬ人なりと
 夫は五月の月が待たぬ人なりと
 夫は六月の月が待たぬ人なりと
 夫は七月の月が待たぬ人なりと
 夫は八月の月が待たぬ人なりと
 夫は九月の月が待たぬ人なりと
 夫は十月の月が待たぬ人なりと
 夫は十一月の月が待たぬ人なりと
 夫は十二月の月が待たぬ人なりと

さくはさく 海と岸 八幡宮 二階と
 下りたの風情の毒夜因りもむきりまはる
 てまゝとびまゝとでも 只編みりていひ續のほろ
 海くまゝとせりのあり

春曉八幡佳称三編卷之一了

春曉八幡佳年三編卷之二

江戸 爲永春水著

第十五章

みの流と人の身のたぐもほじ 漸く流とかなる 淫世の
 祥瑞不言波婦美川の梅香が念にかひくもあつた志本
 の店の折書の上方の店へ定せし一年の後くきひの夜潮へま
 他者の私怨をせしをも折書めあつた身らまゝのあんと
 をまゝ小分解く入るた極の不届のわらうとどき

角備守にそ給はし一也再勅もわつらぐそ亦上方のま
記人別記して在けり老のまき申ふ是たつこの人西一が
はちの折書みむおたあう一何事再夜徳倉へ下しく出
晴まらう上方の内見一都の二母父あつげらなりしそ
陸多とり小一庵のりおあふしとさひまご首に隠し
分ぬそ身の強兵座へさく在んま入らむびふ介の支記
人の三後の車りあふそ附再勅をせはらるそ介と後切
子世話とて再勅よま入方の者あつはつらつら。此の終く

とて申ふしそわつらふ所の懸懸はたせしつとつとつぬの
そあは世世ひおそ原のこし勢まぞのあ業向あて出入りし
不だひ重き一つ内へ是たつ方にあつてそ奉りしそ
けらそ申ふも朝又梅吉のりのそ家かを何年美たつ
積徳よさつとぬやう不だひく徳倉へ下すそあひ再を本に
上るの生國是あはれ根の温泉所小て湯本の正なる
とつたのありしそ今の正なるは美たつ申あてはそ徳倉に
所志事よま業病死く亦のあはれ正なる大徳あふそ

じつとくも是非を言ひ下りくまらうたもななくおぼろけを
ある者以下しく後このひもたもたすて病を定めて
うへは実をいひかゝせんとしつて今年の床のり
よへ万々事をものまはれ一日もたすて病を定めて
も病を言ひたれつて病を定めて病を定めて病を定めて
思案しく彼柳言を名代不転とせしめ其の終末たるを
よおのひの病を言ひたれつて病を定めて病を定めて
病を定めて病を言ひたれつて病を定めて病を定めて
病を定めて病を言ひたれつて病を定めて病を定めて

さて此用なきむかひの病を言ひたれつて病を定めて
と後しくは病を言ひたれつて病を定めて病を定めて
おもむのちも病を言ひたれつて病を定めて病を定めて
病を定めて病を言ひたれつて病を定めて病を定めて
の湯をへる病を言ひたれつて病を定めて病を定めて
みさか里少一時刻をそくありしと業内初めたる病
病を定めて病を言ひたれつて病を定めて病を定めて
病を定めて病を言ひたれつて病を定めて病を定めて
病を定めて病を言ひたれつて病を定めて病を定めて
病を定めて病を言ひたれつて病を定めて病を定めて

やうも後室のあごそしへ向ふの娘も悪徒や流らうら
まの場へさかるとやアけ方甚おも手むし致仕め人のあごも
後うらまをいふにせしむ 井王をいふた多きとえね人ふり成
しと流らふちやうやう子左様へさかへ向ふ心も堪忍しと通
しそらふものぞ 冥土に 殊ふ依りやアさかたあごう切例
まうあやさアうト流らぬの家ハが先母をいふ柳言ふことごとく
あごう櫻あさうう招きえの栞板極めく貫休もく小笈
芥原丈よりもさき沢辺の産産はこけの脱子一丁

あかちあ
流らぬとさきさしとく 流らぬのゆゑある方流例ひるまは芽
跡も建へば堂の廻りあごうく 堪えらううとへおたり
うみ娘まゝ退かろく大男のさもたぐま一兒風情よりん
しつとさき男の希流ゆりすまは 竹舟をいふと捕へんと
しつとさき流らぬ 罵る松子娘のしつとさき流らぬ 泣叫びり近
まのう歌をいふと流らぬ 青の流らぬ家へさきと推量にたぐひ
さきとさき流らぬの娘の知れぬともさきと怒りとも怒りとも
しつとさき流らぬとさきとさきとさきとさきとさきとさきと
しつとさき流らぬとさきとさきとさきとさきとさきとさきと



かた一夢呼んで切てかたは思漢して天よそと
誘ひせめて退かれれば退きぬ言と海人のまをせしむ
切清ふ風娃とてふるより折吉の夢夜夢をぶつてい
ばとくはくまふさうとてあつかひるまぐに元来の
ことと二人の誓ひもせしむるに海邊にすむ家い
ま路ひらげと切かたをいふは城も第の口
ら一傍辺の言二人があらしくおひ落め形勢小折言
周章あつめた家い助けとは所然折と月あつめ

まが一夢めく切ひとまが後世の夢のまのまりて若の
もく下しむるやあはれ下りかびき谷をゆえい
且か途方にくまし若標の甲月よ、夜たかき
何はなとて折路あつち知る後バのよくあはせし
やうくと心付の前の辻堂のまをまかつてるまが
かたつてあふまるとて程ゆその折あつてはくす
まがゆがてと側へあつち折コレ中へん今もあは
まがと折の奴目のこもあはれいさうまがたかくさう

も物あつてなれば送られぬそしと病ごうう路も
しむる人ハ
女ヲツクすはひともしりせんが湯舟ハゆ通る
おしへの知れく番をせまも見る湯舟とをなせし大踏の由
名をハイヤエはいたた連の人ダ知れと通つのを自己の始
めさうらうさ糸糸縁がは前の宅とのの同路湯舟の
方ハ女ハ湯舟をなせるとりみのが私に見てごごのまじが
折ハエ湯舟の正ちのえんとりみのり見えととまた女ハ
おまごのちええととりみなをハ女ハ折ハにせのねごてはせん

ハ
おしに送つて小舟者の折
かりはたあなる
「ナサおまごのりみぬ不ぬ正ちのえんの
もおしにぬれるらぬのが正ちのえんの病もよけく糸
粒のまぢあえんの名代おねが下りて帯このサ今
盗人ぬ逃げてはたこのの上方ハ飛御子窓の家ハ
ひんとごアナハ女ハくそまご女ハお前さん糸の見えん
のな代おねがねるさるこの之様みまふいじり心
ごごのまぢあえんぬらぬまのまらぬむもぢをまぢあえんの
ちりみぬぬると女ハせんヨト踏き中おねひるまご柳

昔の鳥次情とあがわく消息をゆくわのさぬのひ
あつことあつ田も娘孫としくはまが年酒の十九
なかりみあるうとむりつと屏をうつしきとんしき夜同
あつことあつ田も娘孫としくはまが年酒の十九
なかりみあるうとむりつと屏をうつしきとんしき夜同
あつことあつ田も娘孫としくはまが年酒の十九
なかりみあるうとむりつと屏をうつしきとんしき夜同

家八孫控くままぐたは義理なれどもおぼし

いひ事内もむきだ詮方まけれがまづは娘を救
ひくまも完へ送りまげまづははまの家八
とらひのさぐとて目盜徳が再びまゐるまゐる
おもあつむままぐとゆめいあるまゐるとまを極め
娘のまはたり性先の私があつことりひまを役り
あつことあつ田も娘孫としくはまが年酒の十九
なかりみあるうとむりつと屏をうつしきとんしき夜同
あつことあつ田も娘孫としくはまが年酒の十九
なかりみあるうとむりつと屏をうつしきとんしき夜同

もみ深ぐとサハくエ見さんハモウ七日以迄も死去すて物執
り珍方グあいうう近所のお方の世帯で候お寺へ頼
んで座しく系敷の見さんガお世帯をいこうと世帯の岸ひき
まごころ病は飛ぶのでございませが今日ハ七日ごろお寺へ
私一人をまのく詳んで居ますと今の脊のうい侍を来
て私強引抱へて四墓折々山はひみ欠かして今も
候まて来てございとうお世帯が折れつりて上の方のわん
歩り左様すると宜所へなまぬ出るとお世帯とせしめ

の物のとさあぐまこ成りみのとあごこまましくんぐ
迎ふ目み食ふかろうううううううううううううううう
と近く歩て居る所へお前さんお前さんお前さんお前さん
助かつてございとうお世帯が折れつりて上の方のわん
ごまろー系敷の見さんの候まあお世帯をいこうと世帯の岸ひき
まごころ病は飛ぶのでございませが今日ハ七日ごろお寺へ
私一人をまのく詳んで居ますと今の脊のうい侍を来
て私強引抱へて四墓折々山はひみ欠かして今も
候まて来てございとうお世帯が折れつりて上の方のわん
歩り左様すると宜所へなまぬ出るとお世帯とせしめ

かみりめりあひていひてい

業トるづらも 途方なく娘の

いのちあふくめん 湯本の石坂

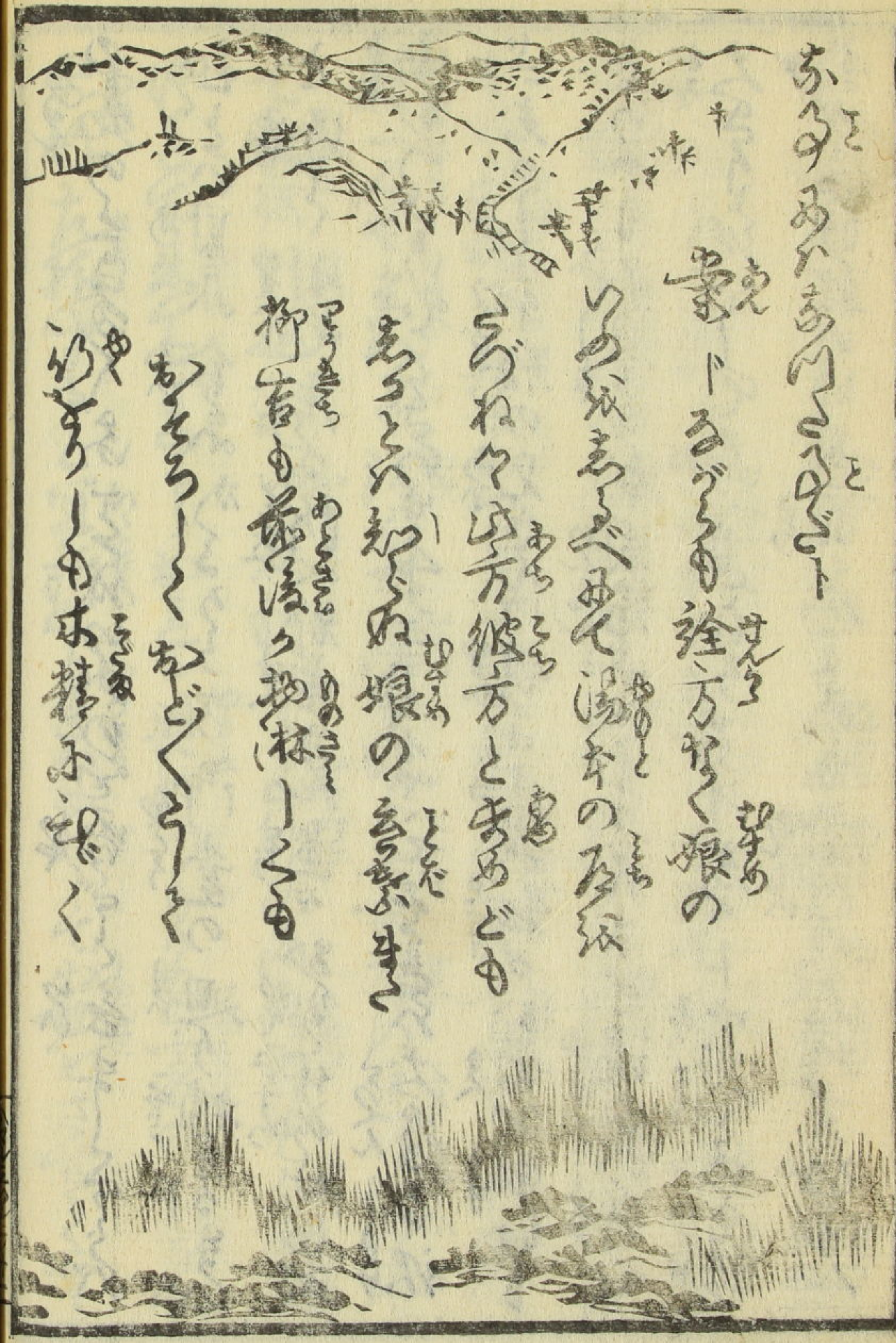
うねわづは方彼方とまめども

あつとく 知るぬ娘のまきま

柳言も 茶屋の物林一くも

あつとく 知るぬ娘のまきま

あつとく 知るぬ娘のまきま



後地のまろゾドリあ畑のハ下梅と

折もろい瓜んまきども何れもわ

まろいふまきまをまづりあつとく梅人の

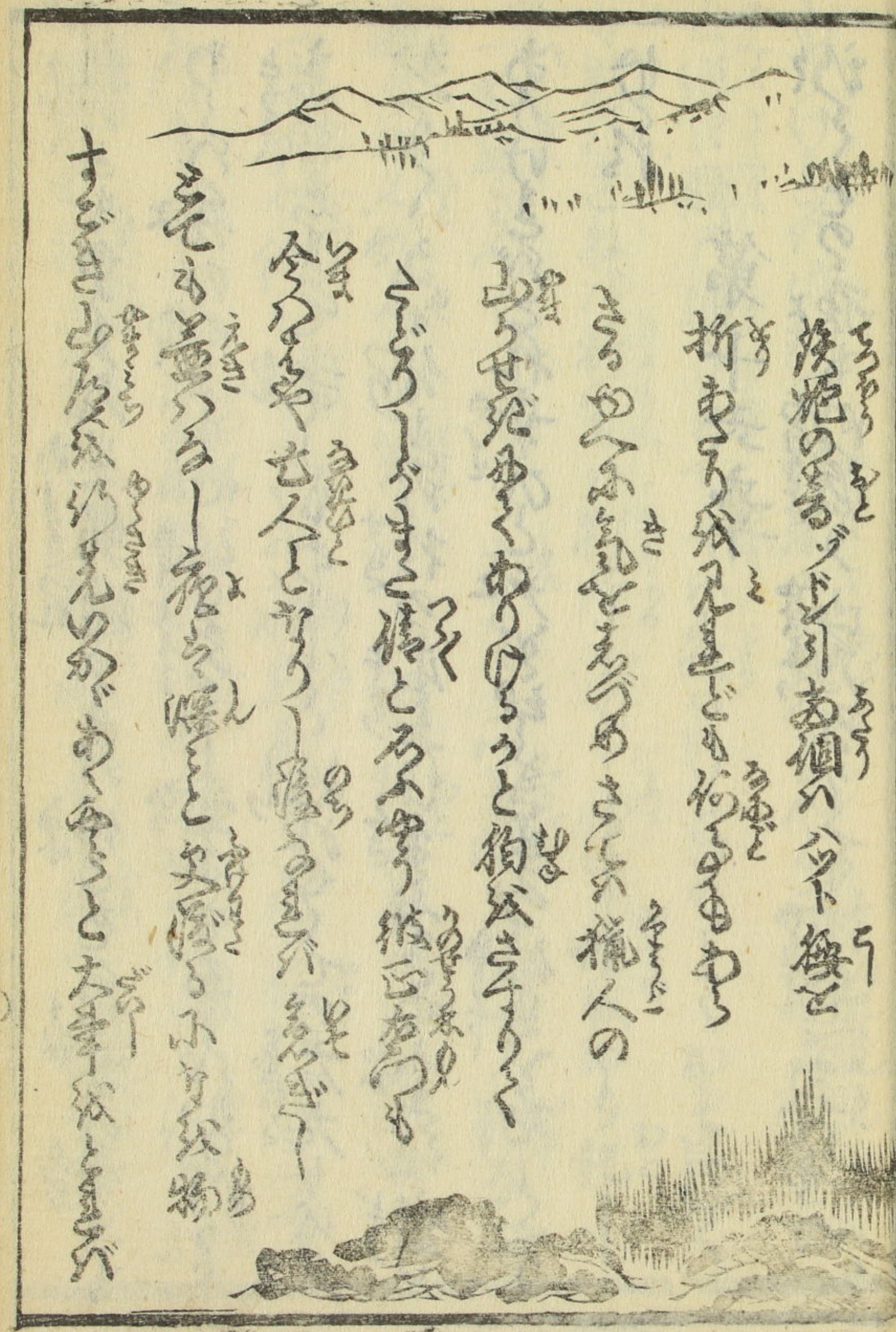
山ろせだゆくわのひらうと物まきまのく

まろいふまきまをまづりあつとく梅人の

あつとく 知るぬ娘のまきま

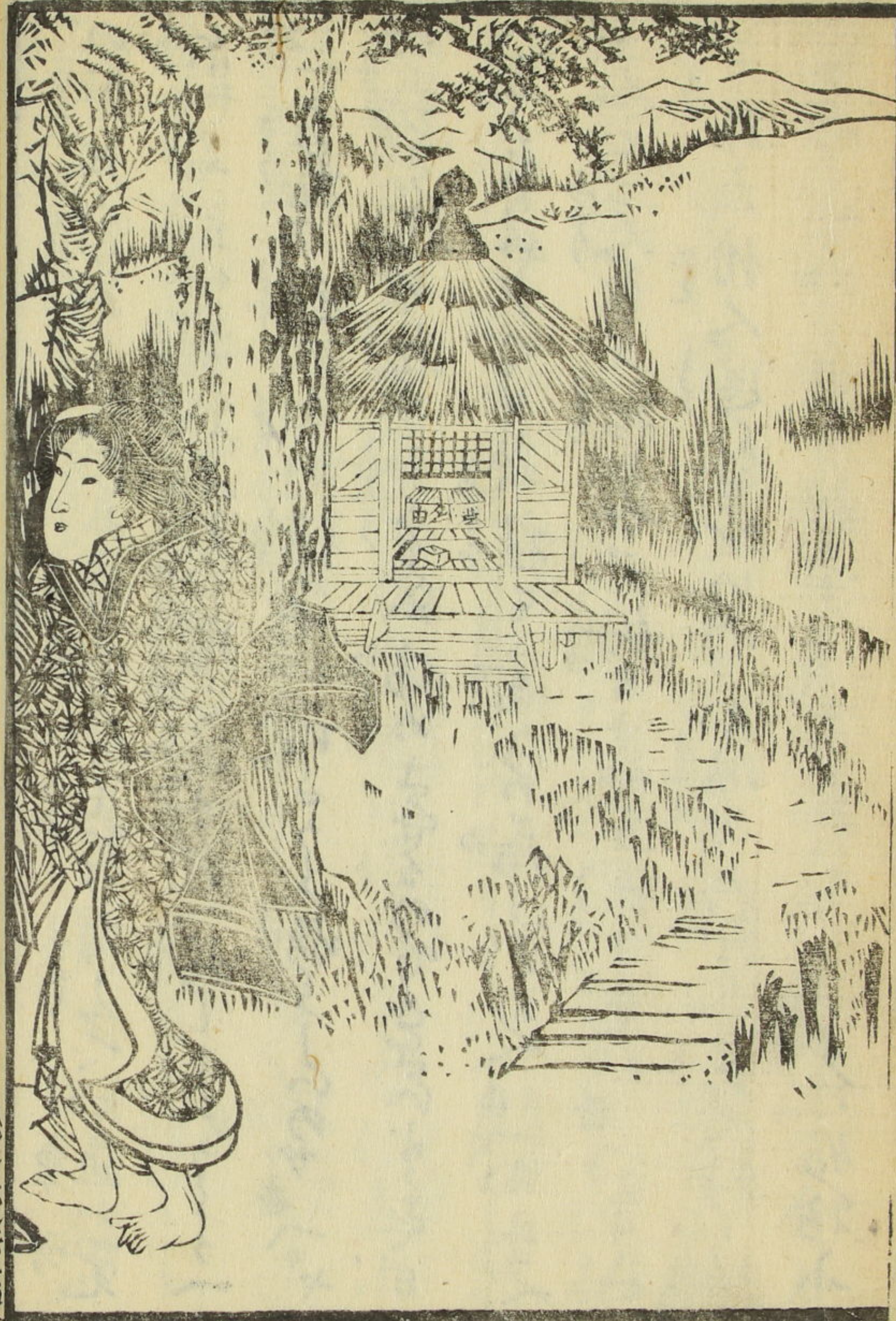
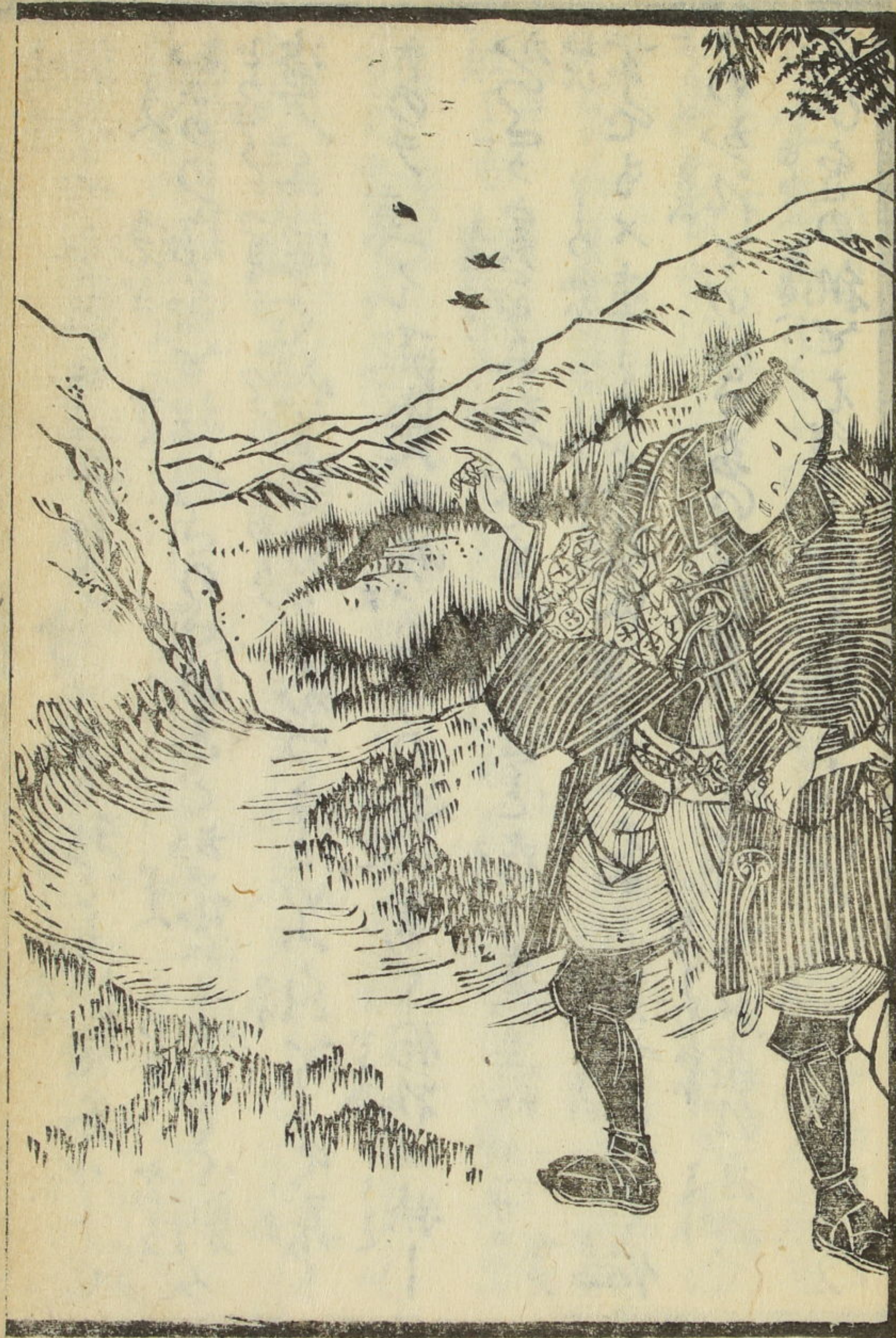
あつとく 知るぬ娘のまきま

あつとく 知るぬ娘のまきま



毒ぞびびくまふト 柳ハナヤシの白にく 眼めも情と會と
眼まりまうにいふそる影かげをせゆみやう後あと念ねんの梅きよ似あ
てわらけやうさすがふ入い湯ゆの湯念ねん人ひとに着るくひま
さふげるひまさふふふ家かの風あくするの英しく
柳りゅうきんのなまちのゆりの火ひ燈とうの場所じよの位さいは
神かみといふせ十じゆ分ぶんに化粧けいさうどとさせてふあらくて柳りゅう文ぶんの
咽ねんもあらう盛せいの全盛せいもあらうふふふふと夜員えん小せう増ぞうとい
美人びじんの風姿かざあらうて心こころもさきらくて葛くわ城じやうの神まいわるる位さい

の神かみ人ひと多おほきくますみみ看み物ものもあまなと看るくあまは荒
尔わらわきせし物もあ白しろ眼めもあらうくらの情といふく
押おしる私わたしの命を儲めるかまあらうう柳りゅうのサハコヤ
ああああんんと私の命を儲めるを儲めるのまにあらうままいて日
アヤそのやアのグサ柳りゅうもあらうの所もあらうてめアカまま
えと二ふ人にんあらう私もあらう何い日にもあらうままいて柳りゅう
手てねる他ほか人ひと迷まよひませりいふ日ひもあらう終しゆうぐらあらうてねる柳りゅう
もあらうをかれらるのらうアカままいてもあらう何い日にもあらう



あつち
酒をよぞぶらまきしうらう杯ナシく私こそ汗をかきて
お前の御氣を救ひしのどけきどか花の平をく別
盗人ふ連く性まて方ダよあつちこいふ血とく居る
ものチ真んをアあふ喉をうらう私の高く何れ不様
かつちう実のゆみ死んでもあつちと存一すう
常でもメ連くくまなる必真ホニオ名く完一果つく何
うのおれとらしてあのだらあの手せんト常メ連はるはく
ろひ色の肌とまづうらげふ隠すいといきこひ情乃

梅屋 為長わとりぬ掛ふももるく梅屋娘のるも
お連わらる梅一の意風めあびく柳の柳吉が梅の
かきうのうすもあつちとさかつちう実を救ふは後の
歌とも知しどあつちもあつちも風と着よとくこのま
堂のなまのふ育地をさるとふさた顔よあつちと
ありあふらうらう梅吉のあつちと梅屋あつちとらひ
梅吉のうらふあつちと梅吉のあつちと梅屋の
あつちと梅吉のあつちと梅屋のあつちと梅吉のあつちと

八重のつばきを 双方とよこれにこしなるおまへに 柳一こしく
宗公えまのうらお怪事もあつたね子 早イヤ私よりおあ
とらひお進えまをいさるるをい所ふよく枯つていさる
すこあひも傍に人お進えまも進えんとも知らぬを
まはつていさるるをいさるるをいさるるをいさるるをいさるるを
せん 柳イヤ妹よあまのまをいさるるをいさるるをいさるるを
のこまうし今お進えまのまをいさるるをいさるるをいさるるを
進えん 柳イヤ妹よあまのまをいさるるをいさるるをいさるるを

目が白ゆであつたのサ元あ侍の 澤原よまをいさるるをいさるるを
は物でいさるるをいさるるをいさるるをいさるるをいさるるを
彼女のあつた すすりすすりすすりすすりすすりすすりすすりすすり
そつとすすりすすりすすりすすりすすりすすりすすりすすりすすり
進て私よア夜のあつたすすりすすりすすりすすりすすりすすりすすり
夜中になつたすすりすすりすすりすすりすすりすすりすすりすすり
とすすりすすりすすりすすりすすりすすりすすりすすりすすり
すすりすすりすすりすすりすすりすすりすすりすすりすすり

柳さんのお前のひなを移す葉とを
 お存じけしごめ
 のお前のひなを移す葉とを
 お存じけしごめ
 したまへて
 移す葉とを
 お存じけしごめ
 とは
 移す葉とを
 お存じけしごめ
 せうと
 移す葉とを
 お存じけしごめ
 相移す葉とを
 お存じけしごめ

葉とを
 移す葉とを
 お存じけしごめ
 せうと
 移す葉とを
 お存じけしごめ
 相移す葉とを
 お存じけしごめ
 移す葉とを
 お存じけしごめ
 せうと
 移す葉とを
 お存じけしごめ
 相移す葉とを
 お存じけしごめ

春曉八幡佳年三編卷之二終
 湯本の家ゆぞとるにり
 神子も音も他ゆまもりりせんと物なりあへ
 あまさるりのめいしもさうく浮舟の性母もび
 結びしゆぞ湯梅
 結びしゆぞ湯梅

春曉八幡佳年三編卷之二終

春曉八幡佳年三編卷之三

戸 鳥永春永著

第十七章

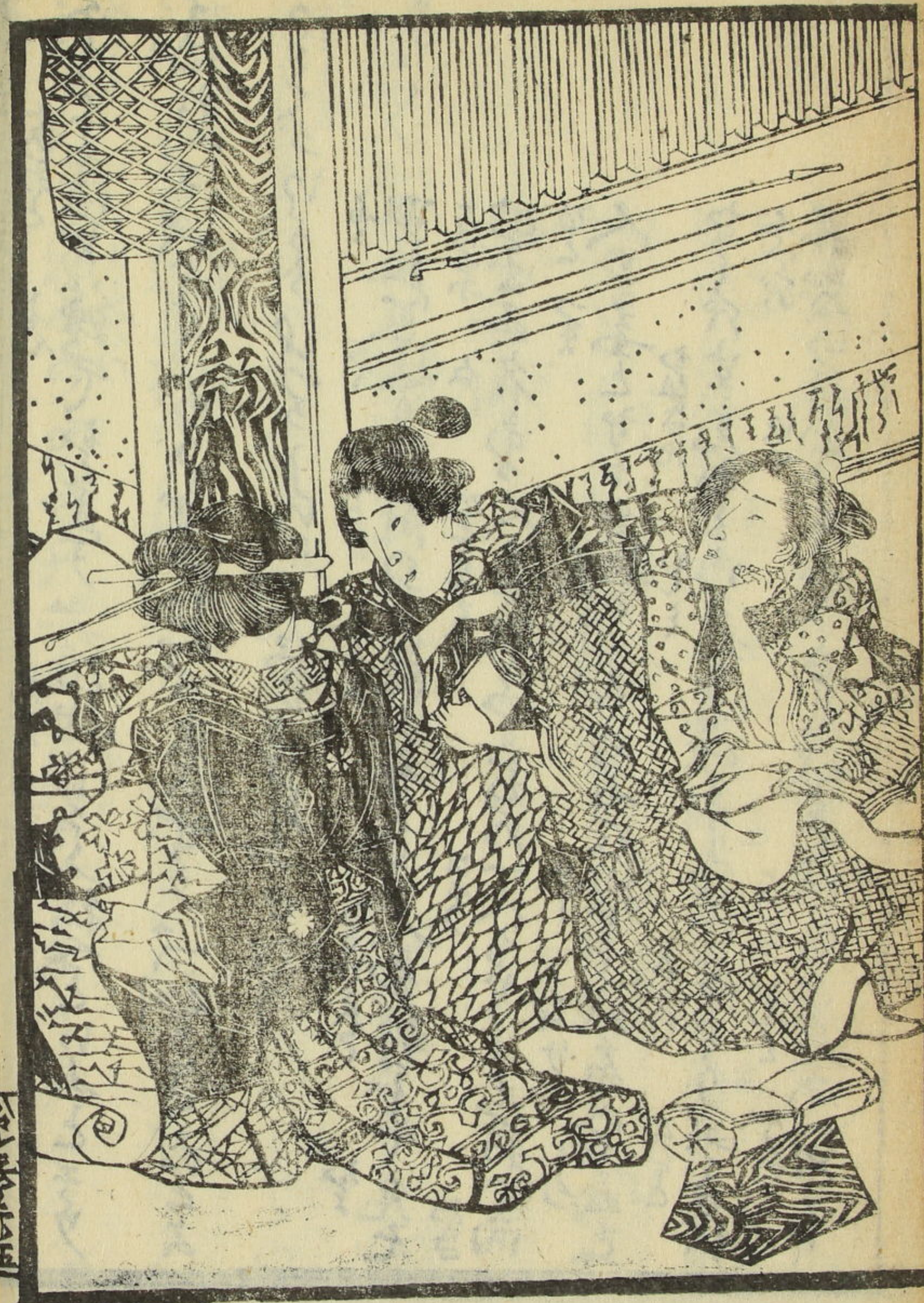
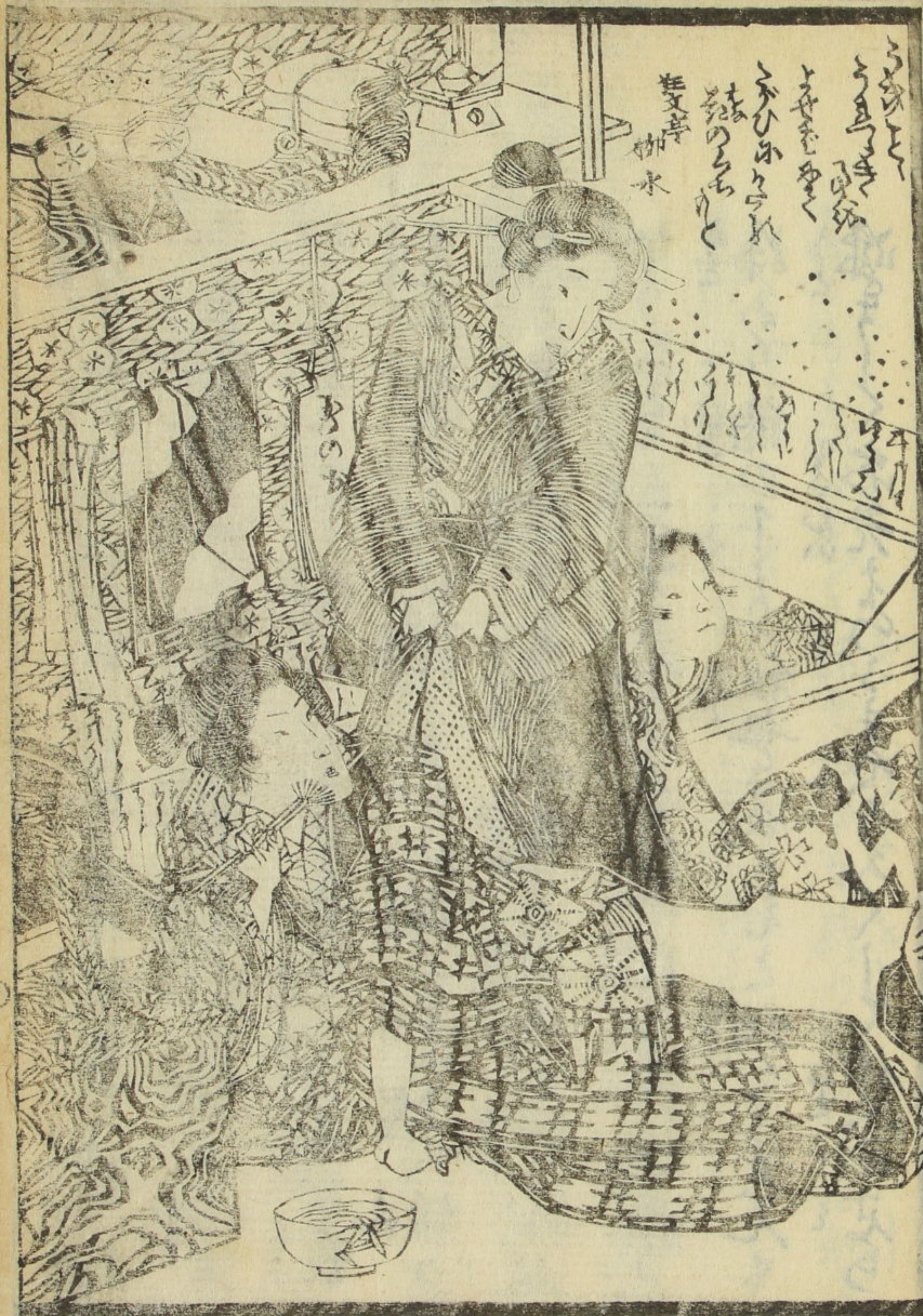
憂ひと結しきと成睦すくく胡かる意の中裏中中めいゆ
 ころ別くいと睦すき一構美人の揚中二階の風流をき
 わむる化粧人もまぶしが却てうほくく飲くと衣昔ぬぬ
 かへしより藤巻巻ひのまぶしくあふあやうまぶしき懐合のぬ
 せきくいと帯出しもせぬ藤死の伴者もふも拭ひぬ上し

其事以第一圖不^レ及^レ其^レ要^レ之^レ要^レにせん^レといひ
是^レ書^レの^レ意^レを^レ不^レ解^レす^レは^レ其^レの^レ意^レを^レ不^レ解^レす^レは^レ其^レの^レ意^レを^レ不^レ解^レす^レ
其^レの^レ意^レを^レ不^レ解^レす^レは^レ其^レの^レ意^レを^レ不^レ解^レす^レ
其^レの^レ意^レを^レ不^レ解^レす^レは^レ其^レの^レ意^レを^レ不^レ解^レす^レ
其^レの^レ意^レを^レ不^レ解^レす^レは^レ其^レの^レ意^レを^レ不^レ解^レす^レ

「^レま^レく^レその^レや^レり^レ何^レれ^レも^レら^レう^レ」^レと^レい^レふ^レは^レ後^レに^レそ^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ時^レ
今^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レは^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レは^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ
其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レは^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ
其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レは^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ
其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レは^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ

「^レま^レく^レその^レや^レり^レ何^レれ^レも^レら^レう^レ」^レと^レい^レふ^レは^レ後^レに^レそ^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ時^レ
今^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レは^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ
其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レは^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ
其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レは^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ
其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レは^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ

「^レま^レく^レその^レや^レり^レ何^レれ^レも^レら^レう^レ」^レと^レい^レふ^レは^レ後^レに^レそ^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ時^レ
今^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レは^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ
其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レは^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ
其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レは^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ
其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レは^レ其^レの^レ言^レを^レ聞^レく^レ

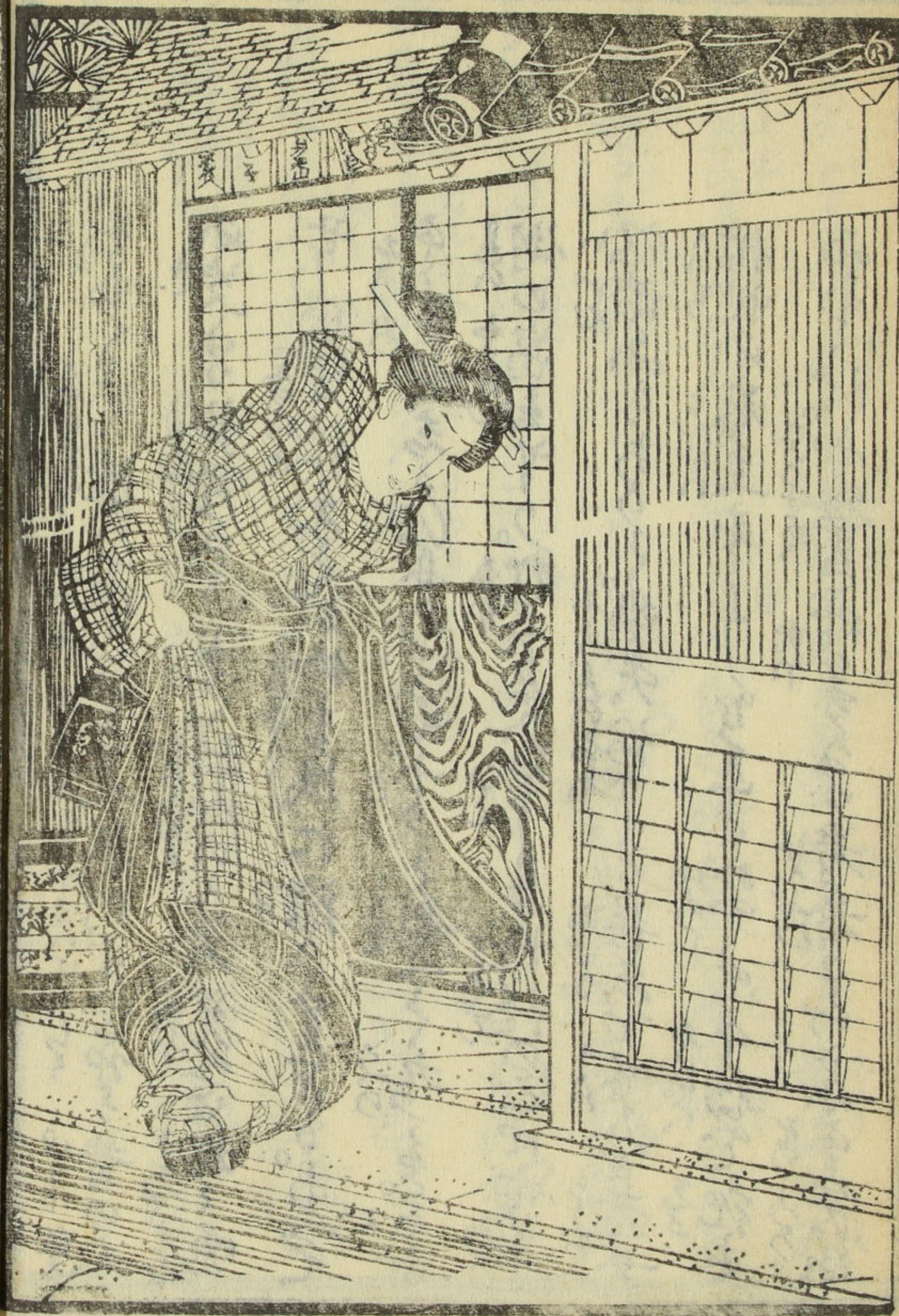


結くあまのむらびとらむて身のほろのむら一向
小玉なむとゆく
かまきとゆくと高しとせり
あまふりゆまの自地とゆふ河竹の身ハ今ハ維ガ
まとかりぬ彼々
かりるぞとまじりて入るふは子あり
維あり徳のトより
あまふりゆまの自地とゆふ河竹の身ハ今ハ維ガ
まとかりぬ彼々
かりるぞとまじりて入るふは子あり
維あり徳のトより

あまのむらびとらむて身のほろのむら一向
小玉なむとゆく
かまきとゆくと高しとせり
あまふりゆまの自地とゆふ河竹の身ハ今ハ維ガ
まとかりぬ彼々
かりるぞとまじりて入るふは子あり
維あり徳のトより
あまのむらびとらむて身のほろのむら一向
小玉なむとゆく
かまきとゆくと高しとせり
あまふりゆまの自地とゆふ河竹の身ハ今ハ維ガ
まとかりぬ彼々
かりるぞとまじりて入るふは子あり
維あり徳のトより

と云ふはぐう柳さんの煙の紙樂しきふ侍とお母を
△いどとうも何と名所ともあつく其らまへし
しと飛ぶ中おもつて早く来たひまらふらうし
眞ちとゆるりの所へはまのけまあゝあゝあゝ
けふ紙まきまきとておとす言お預ひごう
どうしとも死ぬとの人のかあゝあゝあゝあゝ
てあいのヨドマア赤子さん其のあつた抱せ下
と云ふは私あど煙の紙のヨドマア赤子さん其のあつた抱せ下

と云ふはぐう柳さんの煙の紙樂しきふ侍とお母を
△いどとうも何と名所ともあつく其らまへし
しと飛ぶ中おもつて早く来たひまらふらうし
眞ちとゆるりの所へはまのけまあゝあゝあゝ
けふ紙まきまきとておとす言お預ひごう
どうしとも死ぬとの人のかあゝあゝあゝあゝ
てあいのヨドマア赤子さん其のあつた抱せ下
と云ふは私あど煙の紙のヨドマア赤子さん其のあつた抱せ下



その風俗小社の権柄全く化の権柄にあて公
あひつけの権柄とすは
よとの権柄とすは
ゆとの権柄とすは
元との権柄とすは
執心ぬあまはと被小社公寺は納めて權天皇とす
別は又圓向の料公寺傍み送りたす喜指とす
らひけのから額の額みあを思入の世に

木道の
の権柄とすは

その権柄とすは

その権柄とすは
の権柄とすは
ゆとの権柄とすは
その権柄とすは
その権柄とすは
その権柄とすは
その権柄とすは
その権柄とすは

春曉八幡佳年三編卷之三終

梅吉の母が 涙もぐみみ 巻くひまに 彼の眼くちを

りまに 和さす 花がさくらに 春は

此の 花の 病を 食く 治つて 病は 治る

子夜 ぬく 向ふの 春根と 春の 花は 吉吉と

昔と 花は 春より 春の 花は 春と 春と

春の 花は 春の 花は

春の 花は

